江戸時代の僧侶の旅と伊勢参宮
―『杜陀日記』を事例として―

村　上　晴　澄

キーワード：江戸時代・旅日記・街道・僧侶・伊勢参宮

Ⅰ．はじめに

「杜陀日記」は、江戸時代末期の1844（天保十五）年二月四日に、作者の称瑞上人が江戸浅草の称往院を旅立ち、伊勢神宮を参拝して故郷の丹波国園田に至る旅を記した旅日記である。現存するのは、上・中・下の3冊から成る写本（第1図）で、上・中冊の見返しには東路日記と書かれている。立命館大学教授、中西健治によりその写本が入手され、2012年に翻刻および解説『杜陀日記の研究―近世僧侶の旅日記―』が刊行された[1)]。「杜陀」とは、僧侶のことであり、題名は「僧侶の日記」という意味である。日記の構成は、故郷への帰郷の旅全体を船旅にたとえ、道案内を務めた人物のことは「扇童」と呼んでおり、船頭を意識しているといえよう。『杜陀日記』には、作者や随行者の詠んだ和歌も200首以上載せられているほか、法話の内容も記されている。その一方で、日付や地名が豊富で、旅日記としても貴重な資料といえる。

称瑞は、1804（文化元）年、丹波国大山下村（現、兵庫県丹波篠山市大山下）に生まれた。1814（文化十一）年、11歳の時に、摂津国島上郡広瀬（現、大阪府三島郡島本町広瀬）の長沢善五郎の養子となり、1823（文政六）年、20歳の時に、徳本上人の高弟、徳因和上に帰依して出家した。浅草の称往院に入ったのは1830（天保元）年、27歳の時であり、その翌年から住職を務めた。

称往院は、浄土宗知恩院の末寺であり、一心山称往院極楽寺と号し、1596（慶長元）年に白誉上人によって江戸の湯島に創建された。その後、1657（明暦三）年の明暦の大火により、浅草へ移転した。称往院の塔頭、道光庵では、信州出身の庵主がつくる蕎麦が美味で、江戸中に広く知られたこともあった。しかし、蕎麦を目当てに訪問する人があまりにも増え、1786（天明六）年には「そば禁制」の碑が建てられた[2)]。関東大震災の影響により、1927（昭和二）年に、現在地である世田谷区北烏山に移転した。

称瑞が帰郷を決心する契機となった出来事は、師であった徳因和上の七回忌を終えたこと、故郷の喜禅尼から帰郷を促す手紙が届いたことであった。手紙の全文が『杜陀日記』に掲載されていることからも、その重要性が伺える。

第1図　『杜陀日記』写本
出典：本文末注1文献より転載。

しかし、江戸を旅立つ称瑞は、すべての人が忘れがたい故郷へ帰るというのに、気乗りするようにも見えず、しょんぼりとしていた。称瑞にとっては、帰郷の旅であると同時に、江戸で知り合った人々との別離の旅でもあったといえよう。この後、どのような

旅をして、故郷の丹波に辿り着いたのか。本稿では、歴史地理学の視点で『杜陀日記』の旅の行程を地図化し、伊勢参宮に関しては、名所図会も用いて視覚的にその様子を明らかにする。

Ⅱ．江戸時代の旅と旅日記

1. 旅日記とその内容

江戸時代における旅の形態として、大名の参勤交代と、庶民の寺社参宮や湯治が代表例に挙げられる。江戸時代中期以降になると、社寺参宮や湯治を目的として、特に東北・関東地方から伊勢を経て、関西や瀬戸内海沿いの名所を巡る旅の場合、伊勢参宮を名目とした物見遊山の旅が大半であったと考えられている。また、江戸時代に約60年に一度発生したといわれる熱狂的な伊勢参宮は「お蔭参り」と呼ばれ、旅人の中には女性や子どもも多かった。伊勢参宮に多くの人々が旅立った要因の一つとして、御師や伊勢講の存在が挙げられる。伊勢神宮の神官で、山田に邸宅を構えていた御師は、参宮者の宿泊や豪勢な食事、参拝や神楽の奉納に至るまで旅人の世話をしていた。また、御師は受け持ちの地域が決まっており、講の結成を促し、伊勢参宮に導いた。そして、講の中から毎年数名の代参者が選ばれて、伊勢を参拝することが多かった[3)]。

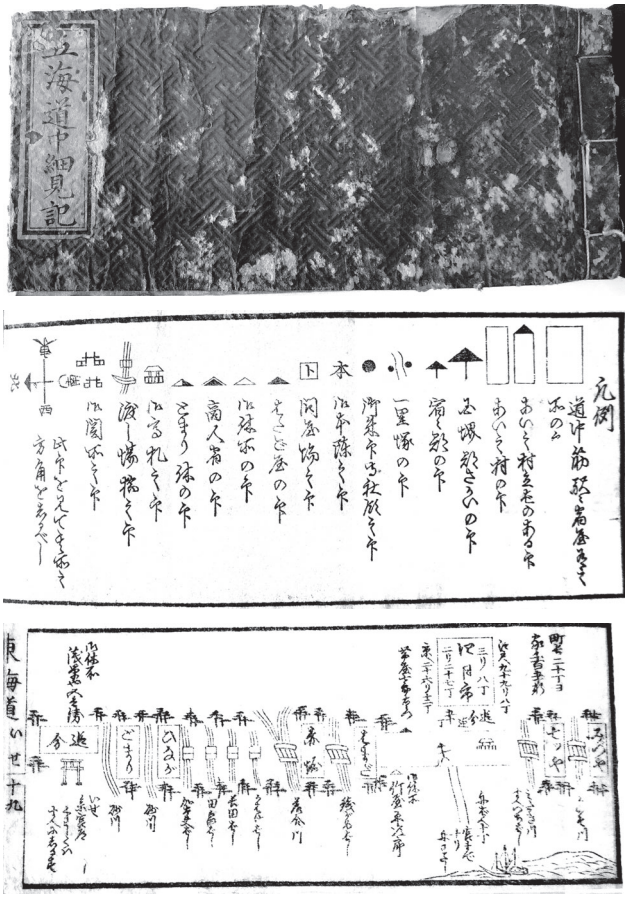
そのような旅人のなかには、旅の行程や金銭などについて日記に書き残した人々も多く、現在では当時の旅の実態を知るための貴重な旅日記史料となっている。山本[4)]は、旅日記の分類として、①名所・旧跡・寺社などの記述に重点が置かれ、自作の歌などが詠んであるもの、②自己の行動を中心にしたもので、年月日・宿泊地・費用及び若干のコメントが記してあるもの、③諸経費を中心としたものの3類型を示している。①は日本人の学者や歌人など文化人と呼ばれる人々に、②は庶民を中心に、社会階層を問わず一般的によく見られるものである。③は、講の資金で旅した際、帰郷後に収支報告するためであることが多いと考えられる。

旅日記は、庶民の伊勢参宮に限らず、学者や文人の史跡を巡る旅、外国人の江戸参府に至るまで様々な人々のものが残されており、それぞれの旅の特徴が明らかにされている[5)]。このように、行程や移動距離のみならず、関所の様子や、街道や宿場の風景、宿泊や食事の料金、道路の状態など旅日記によって記されていることは様々であるが、文学作品としての研究が盛んである『おくのほそ道』からも、宿や関所といった交通面の研究も行われている[6)]。また、文人や僧侶は、各地の人とのつながりを活かした旅をして、経済的な負担も少なく旅を続けたと考えられている[7)]。江戸時代、僧侶の中でも六部（ろくぶ）など脇道を通る人々の通行を制限することはあったが、街道を通り、宿では連泊せず旅を続けている限り制限はなく、遊行上人など素性の明らかな宗教者に対しては寛容であったと考えられている[8)]。称瑞一行は、街道を通り足柄や新居の関所も問題なく通過していたことが『杜陀日記』から判明し、街道を通る素性の明らかな宗教者の旅であったと推定できる。

旅日記の中でも、中世の旅日記のように和歌などが詠まれ、文学作品の体裁をとっているものは紀行文と呼ばれることが多い。とりわけ、『おくのほそ道』は、江戸時代の紀行文の中でも知名度が高い一方で、その内容は、中世の紀行文のように、孤独や悲壮感を感じさせる古典的な作品で、近世の紀行文としては異色の存在であるという見方も示されている[9)]。

江戸時代の文人や学者の多くは、中世の紀行作家とは異なり、事実が正確に記され、地理・地誌に関する記述も豊富な旅日記を記した。例えば、仮名草子作家として活躍した僧侶の浅井了意が著

した『東海道名所記』は、読み物風の名所案内であり、旅を楽しむものと捉えている[10]。朱子学者であった林羅山の『丙辰紀行』は、『おくのほそ道』のような紀行文と異なり、知的で明るく、旅の憂いとも縁遠い内容で風景や名所、名物などの解説ともいえる詳しい記述が特徴とされている[11]。彼は、古代の地誌や辞書の編纂に関わったことから、「案内記の精神にもとづく、感傷性のない明るく客観的な『丙辰紀行』を著した」と考えられており、本草学・儒学者であった貝原益軒の旅日記は、作者がほとんど登場せず、各地の自然・地理・歴史などの情報を中心とした地誌的な内容であり、「実際の旅に役立つ実用書としての正確さ」を念頭に記された[12]。益軒は、里人との対話がその土地のことを知る情報源になるだけではなく、旅の楽しみの一つとなることを示しており、旅を楽しみと捉え、その楽しみを伝え、旅をする人に役立つ紀行文を記したと考えられている[13]。

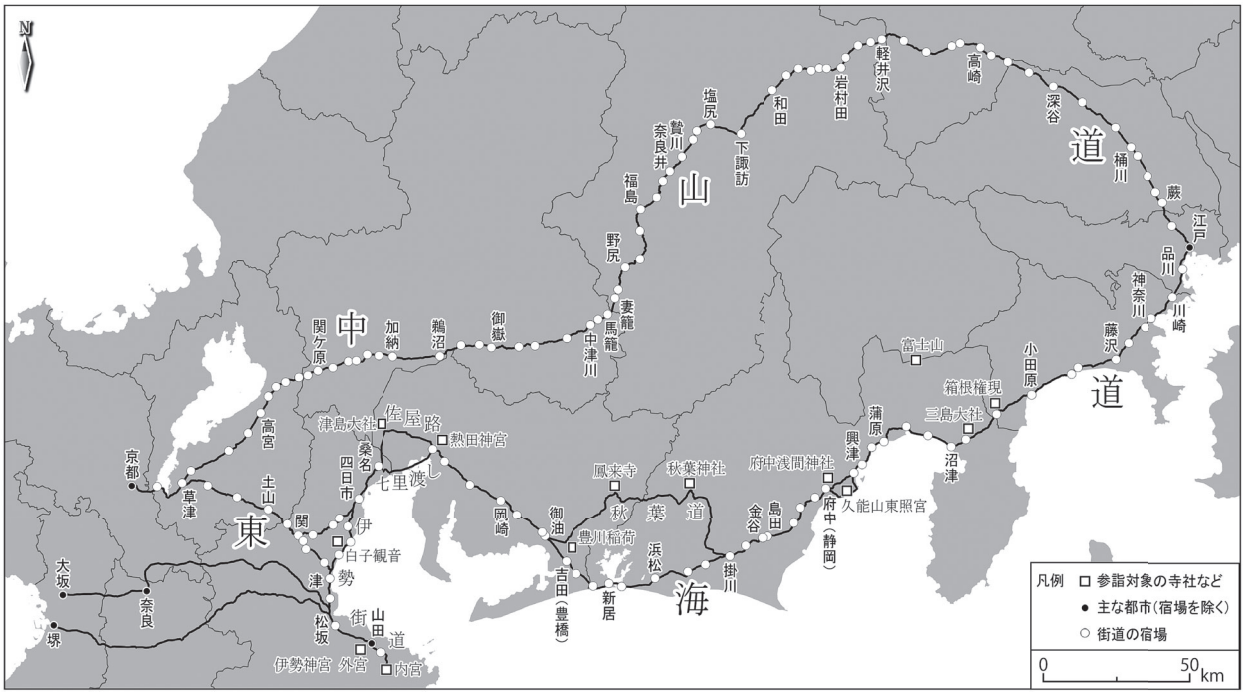


第２図　『五街道中細見記』
資料提供：中西健治氏

貝原益軒らの旅日記は、旅人の案内記の役割も果たすが、文章で書かれたものである。そのため、旅の道中において使用されたのは、視覚的かつ持ち運びに便利な小型の案内記であったと考えられている。例えば、『五海道中細見独案内』は、絵を中心とした内容で好評を得たものと思われ、安政五年に『五海道中細見記』と改題して出版された[14]。第２図の通り、地図の縮尺は正確でないが、距離や統一された地図記号を用いており、地図としての役割を十分果たすものである。シーボルトは、「日本では道路地図や旅行案内書は必要で欠くことのできない旅行用品のひとつである。旅行者は、ヨーロッパで使われるよりももっと多く一般にこういう類を利用する」[15] と記していることからも、道路地図や案内記の類を使用して旅したものと推測できる。また、観光案内の役目を果たす小型の案内記もあり、旅人の行動にも影響を与えていたと考えられている[16]。

2. 旅日記からみた伊勢参宮の行程

新城[17] は、関東方面から東海道を通って、奈良・大坂・京都へ向かう途中に寄りやすい場所に伊勢が位置しているため、中世以来の伊勢参宮が江戸時代に入るとより広まった要因の一つになったと考えた。小野寺[18] は、旅人が東海道をひたすら西へ向かったのではなく、秋葉神社や津島大社をはじめ、東海道から外れたところへも足を延ばしたことを指摘した。代表的な経路として、第３図に示した通り、掛川から秋葉神社・鳳来寺・豊川稲荷を経由して御油で東海道に合流、熱田から佐屋路を通り津島大社に詣でて、桑名で再び東海道に合流する行程がある。このように、伊勢参宮の道中でも、様々な寺社参詣や物見をしていたことがわかる。谷釜[19] によると、江戸時代の旅日記 36 編から抽出した伊勢参宮の道中で参詣対象とした寺社は、秋葉神社が 31 例、津島大社 29、箱根権



第３図　江戸時代における関東から伊勢・関西への主な行程

現・久能山東照宮・鳳来寺 28、熱田神宮 27、三島大社・府中浅間神社 26、白子観音 25 であった。関東以外からの場合でも、例えば、信濃からの伊勢参宮では、中山道などを通って東海道に出てから、熱田・津島などを廻って伊勢に至り、その後は、奈良・大坂・京都などを廻っていた[20]。

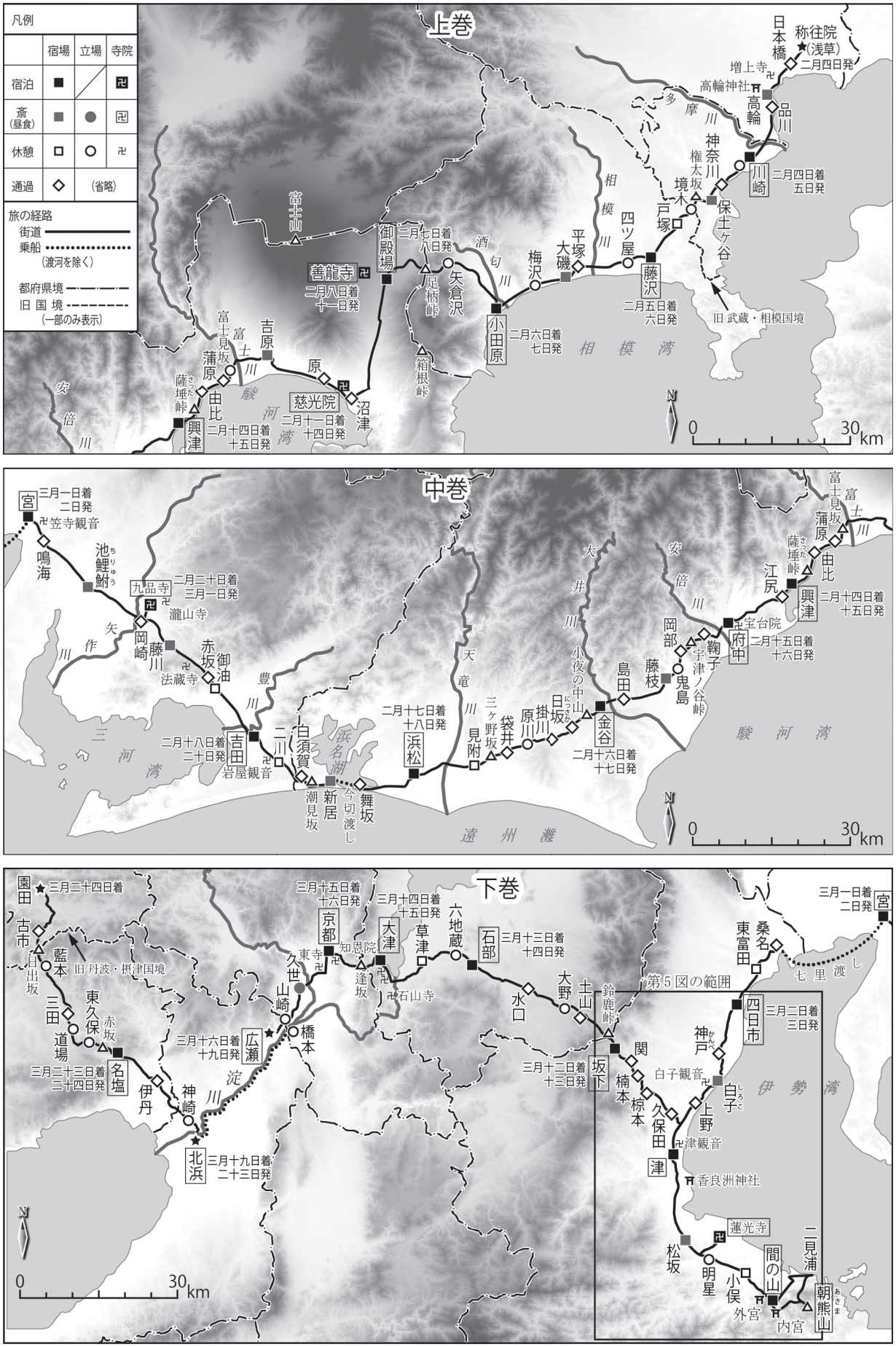
東海道や伊勢街道といった街道沿いには、寺社のほかにも、名物の料理や富士山を望む景勝地など、旅人にとって多くの楽しみが存在した。先の例と同じく、江戸時代の旅日記 36 編から抽出した東海道名物の菓子は、小夜の中山の「飴の餅」が 26 例、「安倍川餅」および宇津ノ谷の「十団子」17、岩淵の「栗粉餅」16 の順で、現在の静岡県域の餅が上位に挙がっていた。また、伊勢街道は餅街道ともいわれるように、沿線で様々な餅が売られていた[21]。

このような江戸時代の旅において、庶民の移動手段は、基本的に徒歩であった。馬を利用した場合も時代劇のように疾駆した訳ではなく、馬丁が馬を曳きながら歩いたため、速度は徒歩と変わらなかった。そのような旅で、人々は毎日どのくらいの距離を歩いたのであろうか。谷釜[22]によると、江戸時代の東北・関東から伊勢方面へ旅人について、伊勢参宮後の大坂方面への旅から帰郷までを含めて、3 編の旅日記を詳細に分析したところ、1 日平均では約 36.6㎞・34.6km・33.2km であり、多くの日が30～40㎞台という結果が示されている。さらに、男性が平均約 34.9km、女性は約 28.6km、男性は 70㎞を超えた例も見られるがごく僅かであり、女性で 60㎞以上の例は存在しないという明確な性別差も明らかにされた。

Ⅲ.『杜陀日記』の概要

1. 行程と特徴

『杜陀日記』の旅は、二月四日に江戸浅草の称往院を旅立ち、三月二十四日に丹波大山に到着するまで、約 800km もの距離であった。その行程をおおまかに見ると、江戸から伊勢までは、東海道か



第４図　『杜陀日記』の全行程

第１表　「杜陀日記」の行程

月	日	旅した区間	移動距離（km）	宿泊先	備考
二	四	称往院～川崎	23.3	（不詳）	見送りの人々と同宿
	五	川崎～藤沢	32.0	帯屋	称往院の法話に出る人々に会い、同宿
	六	藤沢～小田原	32.9	（本陣）	
	七	小田原～御殿場	32.1	冨士屋	足柄峠（標高 759m）を越え、足柄関所を通過
	八	御殿場～善龍寺	3.7	善龍寺	
	九・十		0		
	十一	善龍寺～慈光院	31.8	慈光院	
	十二・十三		0		
	十四	慈光院～興津	42.6	大黒屋	薩多峠（標高 93m）を越える
	十五	興津～府中	17.0	鹿嶋屋	庵原川の川止めに遭う
	十六	府中～金谷	33.3	（不詳）	宇津ノ谷峠（標高 170m）を越える
	十七	金谷～浜松	48.2	大米屋	小夜の中山（標高 250m）を越える
	十八	浜松～吉田	34.0	枡屋	新居関所を通過
	十九		0		
	二十	吉田～九品寺	35.3	九品寺	
	二十一～三十		0		
三	一	九品寺～宮	35.9	銭屋	
	二	宮～四日市	38.6	帯屋	移動距離に七里渡し（23.5km）を含む
	三	四日市～津	33.8	野口屋	
	四	津～蓮光寺	29.0	蓮光寺	
	五		0		
	六	蓮光寺～朝熊山	28.7	何がしが家	朝熊山（標高 555m）に登る
	七	朝熊山～間の山	9.3	いぶきや卯兵衛	
	八	間の山～蓮光寺	10.4	蓮光寺	
	九・十		0		
	十一	蓮光寺～津	20.5	（不詳）	
	十二	津～坂下	28.9	苫屋	
	十三	坂下～石部	34.3	大黒屋	小夜の中山（標高 357m）を越える
	十四	石部～大津	29.0	丸屋	
	十五	大津～京都	12.0	茶久	
	十六	京都～広瀬	20.3	長沢家	
	十七・十八		0		
	十九	広瀬～大坂（北浜）	33.4	（知人宅）	淀川の川船 32.2km を含む
	二十～二十二		0		
	二十三	大坂～名塩	30.2	（不詳）	
	二十四	名塩～大山	44.7	称瑞の家	赤坂峠（標高 300m）・日出坂峠（240m）を越える
		江戸～大山の総距離	805.3		

ら伊勢街道へと進み、その後は庶民の旅のように奈良へ行かず、京都は知恩院、大坂は知人の家を訪ねる目的でのみ行った（第４図･第１表）。そのため、先に見た観光要素の強い庶民の旅の行程とは異なり、丹波への帰郷が目的のため、ひたすら街道を移動した旅であったといえよう。その一方で、称瑞は、かつて東海道や伊勢街道を旅したことがあり、久能山東照宮や秋葉神社へ行ったこともあった。その際にも旅日記を記したこと、そのうち少なくとも１編は『都の家づと』という題名であったことが、『杜陀日記』から判明する。

『杜陀日記』が、庶民の旅と異なるもう一つの点は、各地の寺院を訪ね、法話を開いたことであった。それが、行程に大きく影響したのは、御殿場の善龍寺に行くため、小田原から東海道を外れて矢倉沢往還を通った時であった。その後も、沼津の慈光院、吉田の枡屋（宿）、岡崎の九品寺、松坂近郊の蓮光院、伊勢山田の欣浄寺で法話を開いた。これらの寺院は、称瑞自身が住職を務めた称往院と同じく浄土宗である（第２表）。善龍寺では、「元より契り浅からぬ精舎にしあれば」と、九品寺では、「此のみ寺こそ内との隔なき中なれば、心も安かりき」と記されているため、日ごろからつながりの深い寺院を訪ねる旅という側面も見て取れる。さらに、吉田では仏道を求める人々が宿にやってきたため法話を開き、七里渡しの船中でも説法するなど、寺院に限らず積極的に民衆教化を行っていたといえよう。

第２表　称瑞が訪れた寺社

寺社名	宗派	所在地	備考
増上寺	浄土宗	東京都港区芝公園	
神明社	（神社）	東京都港区高輪	高輪神社
善龍寺	浄土宗	静岡県御殿場市中畑	滞在し法話を開く。
慈光院	浄土宗	静岡県沼津市市道町	滞在し法話を開く。
清見寺	臨済宗	静岡市清水区興津	
宝台院	浄土宗	静岡市葵区常磐町	
岩屋観音		愛知県豊橋市大岩町	
法蔵寺	浄土宗	愛知県岡崎市本宿町	法楽を奉納。
大樹寺	浄土宗	愛知県岡崎市鴨田町	
九品院	浄土宗	愛知県岡崎市鴨田町	一週間滞在し、法話を開く。徳住和上の開基。
滝山東照宮	（神社）	愛知県岡崎市滝町	
笠寺観音	真言宗	名古屋市南区笠寺町	
白子観音	真言宗	三重県鈴鹿市寺家	
蓮光院	浄土宗	三重県松阪市新開町	伊勢参宮の往路・復路に滞在。法話を開く。
金剛證寺	臨済宗	三重県伊勢市朝熊町岳	
称往院	浄土宗	三重県伊勢市宇治館町	神宮寺の塔頭。
惣通寺	浄土宗	三重県伊勢市山田	法話を開く。
欣浄寺	浄土宗	三重県伊勢市一之木	法話を開く。
観音寺	真言宗	三重県津市大門	
地蔵院	真言宗	三重県亀山市関町新所	
石山寺	真言宗	滋賀県大津市石山寺	
円福院	天台宗	滋賀県大津市富士見台	室町時代の寄木細工の五百羅漢が安置されている。
義仲寺		滋賀県大津市馬場１丁目	木曽義仲や松尾芭蕉の墓がある。
知恩院	浄土宗	京都市東山区林下町	浄土宗総本山。法親王に謁見。
東寺	真言宗	京都市南区九条町	

2. 旅の行程と様子

『杜陀日記』の旅で通行した道は、東海道や伊勢街道といった街道であり、山伏の旅に見られるような村々を結ぶ道を辿った旅[23]ではなく、伊勢参宮に向かった庶民と同様の旅であったといえる。行程表（第1表）を見ると、街道を移動した日のほとんどは、30㎞以上もの距離を旅したことが分かる。全日程の平均移動距離は約27㎞となるが、二月七日、御殿場から善龍寺に移動した日のように、わずかな距離で目的地に到達した場合もあり、旅を終日続けたと考えられる日の平均移動距離は約33㎞となる（第1表）。

また、その行程には、標高が海抜数メートルの海岸沿いから数百メートルの峠まで存在したが、第4図・第1表から判明する通り、峠を越えたことに関係なく、30㎞以上を移動していた。例えば、二月六日、海岸近くの小田原から春雨の降る中、標高759mの足柄峠を越えて、御殿場まで旅した。足柄峠を越えて、竹の下に到着すると、随行者はみな遅れていた。この日の移動距離は、『杜陀日記』の平均とほぼ同じ約32.1kmであった。二月十七日は、朝から小夜の中山峠を越えたにも関わらず、金谷から約48.2㎞も旅して浜松に到着し、『杜陀日記』で最長の行程となった。この日は夜明けとともに旅立ち、夕暮れ近くになって浜松宿に到着した。旧暦二月半ば頃の夜明けは5時30分頃、日没は18時10分頃であり、時速4kmであれば、午前・午後に6時間ずつ歩いたものと推定できる。

御殿場や浜松に到着した夜は、「此の夜はいたく疲れしゆゑ、何事もえしるさず」と記しており、峠を含む長旅で疲弊したことがよくわかる。また、峠を越えた後によく休憩したこと、1日中旅を続けた日には、必ず何度も休憩していたことが判明する。行程図に示した通り、休憩は宿場のほか、立場でとったことも多かった（第4図）。このように、「間の宿」とも呼ばれた立場は、長距離を連日旅した人々にとって、休憩のため欠かせなかったと考えられる。

Ⅳ.『杜陀日記』にみる街道の旅

1. 僧侶の旅の特徴

本章では、『杜陀日記』の旅を明らかにする上で、特に重要と考えられる区間を取り上げる。まず、上巻の日本橋から藤沢までの東海道を事例として、称瑞の行動や僧侶の旅としての特徴を明らかにする。

日本橋を過ぎて、新橋近くの芝神明宮と増上寺を参拝し高輪で休憩した。その後、東海道最初の宿場である品川までは多くの人が見送りについてきた。次の川崎が初日の宿泊地となり、まだ同行していた見送りの人々とともに泊り、様々に語り合って時を過ごした。翌朝、大半の見送りの人々と川崎で別れたが、最後まで見送りした京橋の久保主なる人物は、神奈川まで同行した。称瑞がかつて修行した浦島観音（護国山観福寺）は、先を急ぐため立ち寄らなかった。

そして、次の保土ヶ谷では僧侶の昼食である斎[24]をした。この日は藤沢に泊まったため、1日の行程のおよそ半分の地点で昼食をとったことがわかる。この保土ヶ谷を出て、急な権太坂を登りきると武蔵・相模国境を示す境木が存在した。「おのれ年比、武蔵国に住なれしが、今日ぞ此地の名残となりなんかしと思へば、法の契り深き人々の思ひ出られていと悲しかりき」と、住み慣れた武蔵国を離れることになり、日頃関わりの深かった人々とのことが思い出されて悲しむ様子が伺える。この先、名物の牡丹餅が売られている焼餅坂を通ったが、僧侶が食事をしない非時[25]であったため、

それを味わうことができなかった。この先、信濃坂などを経て戸塚に到着すると、一行のほかの人々は皆遅れており、称瑞は東海道五十三次にも描かれている米屋の軒先で休憩しながら待っていた。江の島や鎌倉へも行きたかったが、急ぐ旅路の途上であり、諦めざるを得なかった。藤沢に到着すると、称往院の法話に出ていた人々と出会った。そして、同じ宿に泊まり、法を説き、書き物を与えた。その夜は、称往院で法話をする夢を見た。

2. 旅の楽しみと法話

本節では、中巻の浜松～吉田を事例に、称瑞が道中で何を楽しみ、関心をもっていたのか、また、珍しく宿で法話を開いた時の様子ならびに称瑞の僧としての姿勢を明らかにする。二月十八日、吉田の枡屋という宿に到着し、池に落ちたように雨で濡れた称瑞の姿を見て驚いた宿の主に、このような時も風雅の道（歌道）を忘れないのかと尋ねられた。その問いかけには、「敷嶋の道（歌道）などは及ぶべき事にあらず。たゞ古への聖たちの詠みおかれしを見て、慕はしく思うのみ」と、答えている。中西[26]が指摘している通り、道中では過去の聖たちが和歌を詠んでいたことにも関心を示していながらも、自分のような念仏行者には、そのようなことは一切無縁であり、念仏を唱え浄土を希求することが肝要と考えていた称瑞の姿勢がよくわかる場面である。

この日は、雨の中を旅して疲れており、寝ようとしたところ、仏道を慕う人々がやって来たので、明け方まで法話を開いた。そして、翌朝には、昨晩集まった人々の知人がたくさんやって来て、ここに１日滞在して法話を開くことになった。法話の後、人々は涙を流し喜び、宿の主人も「深き因縁おはしてこそ、ここには宿らせ給ひぬらん。あまたの人々、みのり[27]の道のかしこく[28]尊ときをも知り、善を積むのなかだちともなりぬ」と有難みを述べ、非常に喜んだ。そして、吉田を旅立つ二月二十日の朝、法話に集まった人々が、東海道五十三次にも描かれている有名な吉田の橋までついてきて、称瑞は大勢の人々に見送られながら吉田を後にした。

3. 伊勢街道の旅と参宮

ここでは、七里渡しの船上の説法にはじまり、故郷の文保寺に入るまでの下巻のうち、伊勢参宮を中心に取り上げる。桑名で七里渡しの船を降り、東海道を南下した。桑名周辺は焼き蛤が名物であり、どの茶屋でも蛤を焼いて売っていたため、魚介類も食さなかった称瑞が休憩できる茶屋はなかった。道端に荷物を降ろして休憩していると、七里渡しで同じ船に乗り合わせた僧侶が追いついてきて、ともに休憩した。称瑞が、どこから来たのか尋ねると、時間がなく訪問を断念した無量寿寺の住職であることが判明した。ともに四日市まで歩き、同じ宿に泊まり、無量寿寺の史跡について語り合った。

翌朝、東海道から伊勢街道が分岐する日永の追分で、東海道を旅する住職と別れ、称瑞一行は津へ向かった。「此の国は神風立ちてみ仏の方は疎かがちなんめり。神仏一体[29]、和光同塵[30]といふ事を知らぬがち（地）なれば也」と、伊勢国では神道が幅を利かせ、佛教が疎かになっていることを残念に思っている。

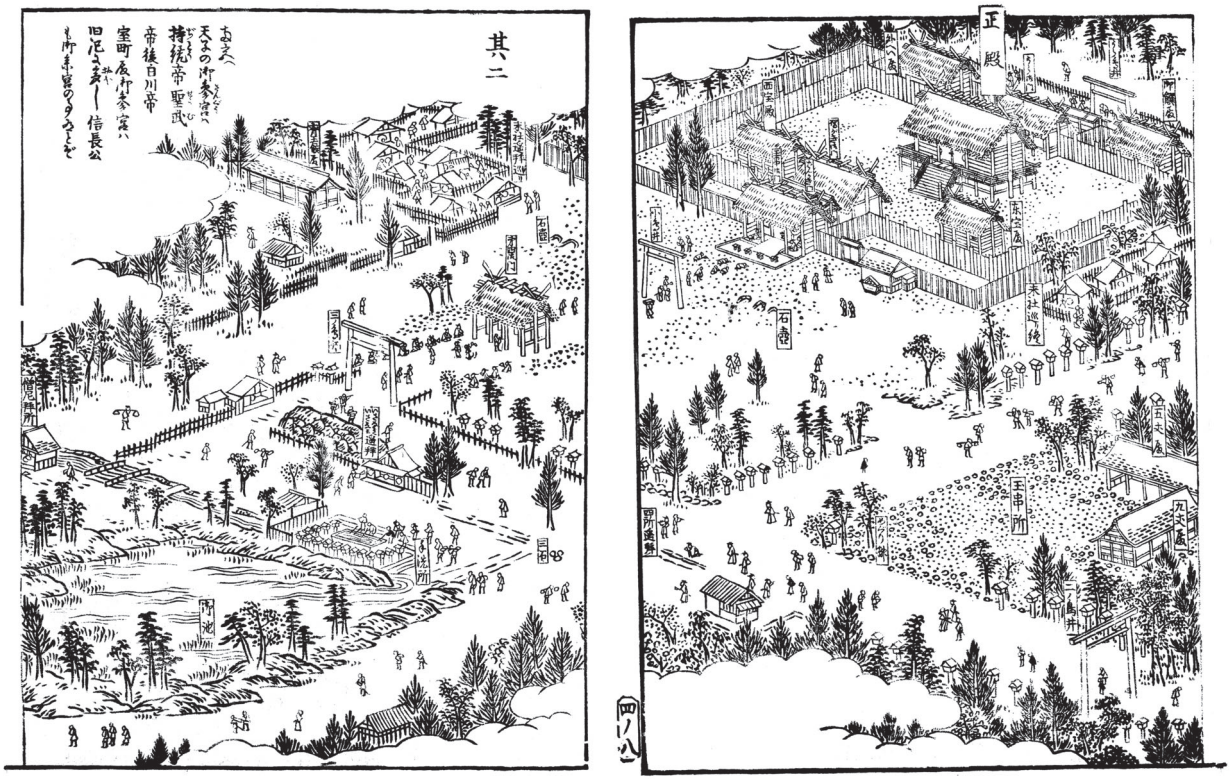
三月四日、津から松坂を経て、浄土宗の蓮光寺に入った（第５図）。留主守の柳暃という人が、三月六日から一行の伊勢参宮の案内役を務めた。庶民の場合は、居住地ごとに特定の御師が決まっていて、宿泊のみならず伊勢湾の海産物を中心とした豪華な食事、神楽の奉納や祈祷、参宮に至るまで世話をすることが一般的であった。しかし、称瑞一行は僧であり、神楽を奉納することも、御師

の世話になる必要もなかったといえよう。

伊勢街道を歩いていると、明星の茶屋に差し掛かった。柳昇は、大我上人[31]もかつて立ち寄った茶屋だからと、先を急ごうとする称瑞を引き留めて休憩した。宮川を渡る手前の小俣では、松屋という家を訪ね、その主人は称瑞との再会を喜び、もてなしてくれた。かつて東海道を旅した際、境木から追分まで連れ立った人物で、詳細は過去の旅日記に記されているという。

称瑞一行は、はじめに伊勢神宮の外宮を参拝した。江戸時代の神宮では、死穢に接した者などを禁忌する習慣があった。それは僧侶に限ったことではなかったが、僧侶のために、専用の拝所である僧尼拝所（そうにはいしょ）が設けられていた[32]。『杜陀日記』から、外宮での参拝の様子は判明しないが、『伊勢参宮名所図会』（第６図）の左端には、僧尼拝所から参拝中の僧と、そこに向かう僧が描かれており（第７図）、称瑞もこのように僧尼拝所から参拝したものと考えられる。さらに、『伊勢参宮名所図会』の中央より上寄りの

第５図　『杜陀日記』の行程（伊勢街道）



第６図　外宮の様子（『伊勢参宮名所図会』巻四ノ八）

出典：国立国会図書館デジタルアーカイブより画像補正・転載。

描写から、当時の僧侶以外の人々は、現在は立ち入りできない玉串御門の前まで入って参拝していた様子や、廃仏毀釈で取り払われた末社巡りの社が存在したことも判明する。

一行は、外宮の参拝を終えると、間の山を通って内宮へと向かった。

「間の山と云ふ処、いと賑はし。お杉お玉とか言へるをみな、ここら出て、三筋の線の調べさへあやしく、をかし。「いかなものか」と問へば、「非人なり」と答ふ。」

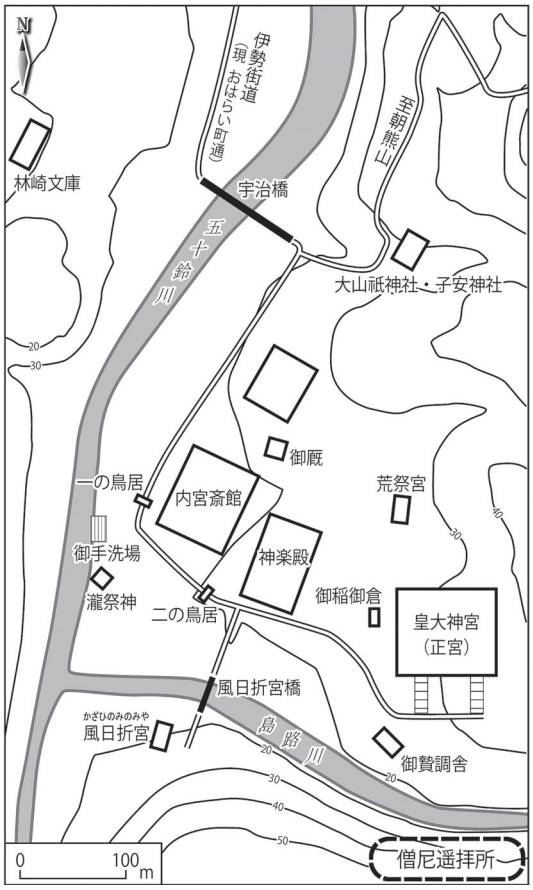
第７図　外宮の僧尼拝所
出典：第６図と同じ。

間の山とは古市と呼ばれる全国的にもよく知られた遊郭が存在した。そこには、三味線を奏でながら、旅人が投げる銭を避けたり、撥で受け止めたりするお杉・お玉と呼ばれる芸人たちがいた。お杉･お玉とは、このような芸人たち全般のことを指しており、特定の人物名ではなかった。また、参宮者の罪障を投銭によって受ける非人身分の人々であった[33]。『伊勢参宮名所図会』（巻四ノ三十七）には、その様子が描かれている（第８図）。杜陀日記の一文は、これらのことを端的に記した記述と言えよう。そして、称瑞はここでも人々と会話を交わし、そのことを日記に記しており、事実に忠実な記録といえる。

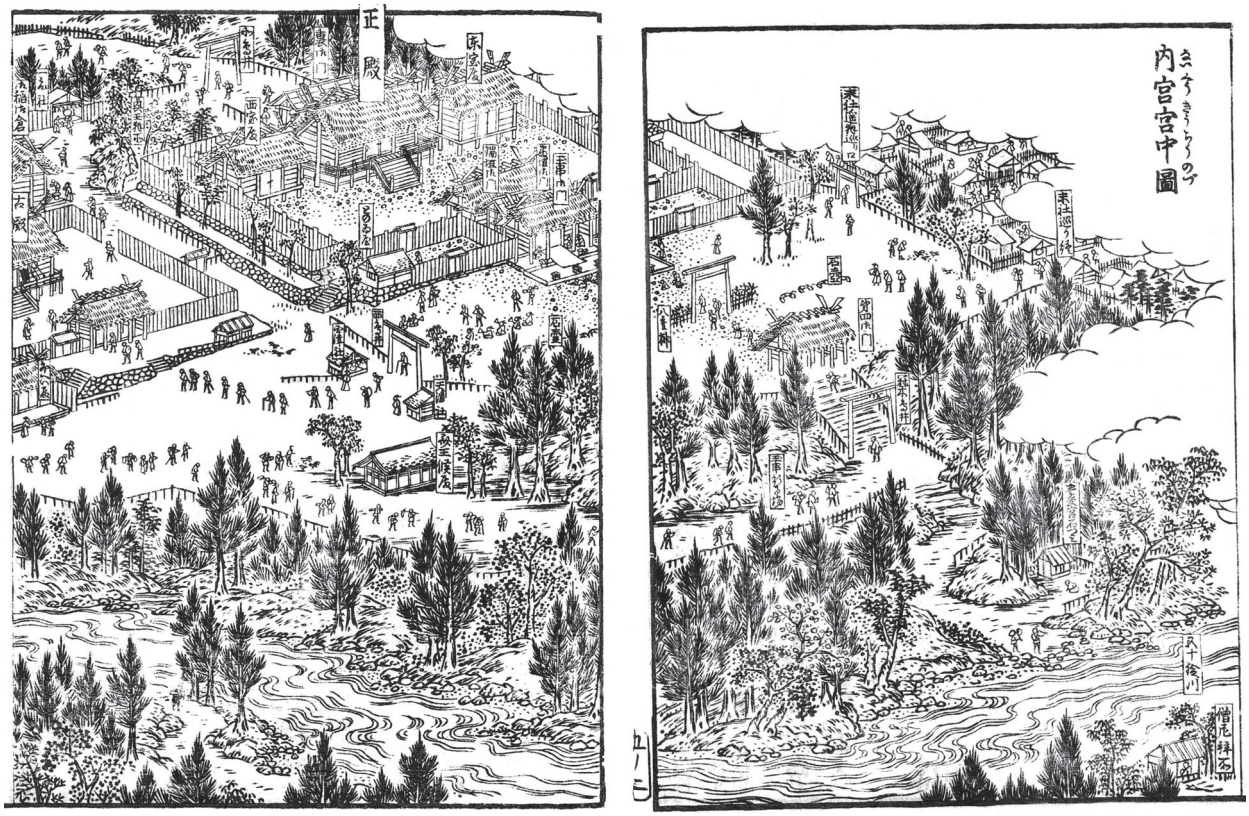
次に内宮での参拝について、『杜陀日記』には「法師のをろがむ処は五十鈴川を隔てて、しずかなる処なり」と、僧尼拝所から拝んだことが明確に記されている。江戸時代の伊勢国の地誌である『勢陽五鈴遺響』には、僧尼拝所について以下のように書かれている。

「風宮橋を渡り、南の隅より枝橋を経て左に至る路の奥にあり。正殿の南の崖より五十鈴川を隔て、北

第８図　間の山の「お杉・お玉」
出典：第６図と同じ。



第９図　内宮の「僧尼拝所」推定位置
注：施設配置等は現在のものである。



第 10 図　内宮の様子（『伊勢参宮名所図会』巻五ノ二）
出典：第 6 図と同じ。

面を拝する所なり。遥拝所にいたる路程、風宮橋より九十四間あり。」
この記述と、内宮の施設配置図（第 9 図）を比較すると、北側から風日祈宮橋（風宮橋）を渡って左、つまり東へ進んだ道の奥に僧尼拝所が位置することや、風日祈宮橋から僧尼拝所まで九十四間、一間は約 1.818m のため、170.892m であったということになる。この九十四間という距離の記述が正確であるならば、内宮正殿の正面よりも西南から拝んでいたことになる。『伊勢参宮名所図会』（第 10 図）の右下隅には、正殿の向かいに川を挟んで僧尼拝所が描かれている（第 11 図）。そのため、『杜陀日記』に「法師のをろがむ処は五十鈴川を隔て」と記されていることは正確であると考えられる。

また、風日祈宮橋は、かつて五十鈴川御橋と呼ばれていた。この橋の下を流れる島路川も、五十鈴川と呼ばれており、伊勢参宮名所図会には、五十鈴川と書かれている（第 11 図）。この橋は僧侶と関わりが深く、「太神宮風宮　五十鈴川御橋　明応七年戊午本願観阿弥　敬白」という銘がある通り、1498（明応七）年に勧進聖[34]によって造営された[35]。

称瑞一行は、内宮参拝後に朝熊山を登り、その晩は山頂近くの家に泊まった。翌朝、遠くに富士山を望み、手前には伊勢湾や知多半島の広がる風景を満喫した。そして、朝熊岳金剛證寺では、御本尊の「福威智満虚空蔵大菩薩」を拝んだ。次に、朝熊山を下りて二見浦へ行き、浦々の美しい風景を眺めた。その後、内宮の近くへと戻り、菩提山称往院と天照皇山大神宮寺（西行谷神照寺）を訪れた。神照寺は『伊勢参宮名所図会』（第 12 図）にも描かれており、西行が庵を結んだとの伝承を持ち、芭蕉の詠句があった。こ

第 11 図　内宮の僧尼遥拝所
出典：第 6 図と同じ。

の神照寺の奥に称往院が存在し、称瑞が住職を務めた浅草の称往院と同じく、徳因上人の開基であった。江戸時代の伊勢国の地誌である『勢陽五鈴遺響』には、「称往院、神宮寺の奥にあり。浄土宗五刧院とも称す。慶長中、称往上人開基す」と書かれている。『杜陀日記』に「さて、此の山の坊舎をも残るかたなく見巡りしが、そのうち五刧院の本尊こそすぐれて有がたがた思へりしが」と記されており、すべての塔頭をまわり、五刧院つまり称往院の本尊が優れていると感じている。これらの寺院は、明治時代初期に廃仏毀釈のために廃寺となった[36]。その夜は間の山の宿に泊まり、翌日は林崎文庫を訪問したほか、山田では欣浄寺で法話を開いた。紙幅の都合上、その後の詳細は省略するが、再び蓮光寺に戻り、三月十一日に京都へ向けて旅をはじめた。津に向かう途中で香良洲神社を参拝した。そこは白砂青松の海岸が近く、海辺の風景を満喫した。三月十二日は、津の恵日寺観音寺を訪れてから、伊勢別街道[37]を通って関に至り、再び東海道の旅がはじまった。関の地蔵院を拝んでから、鈴鹿峠の山麓に位置する坂下に泊まった。

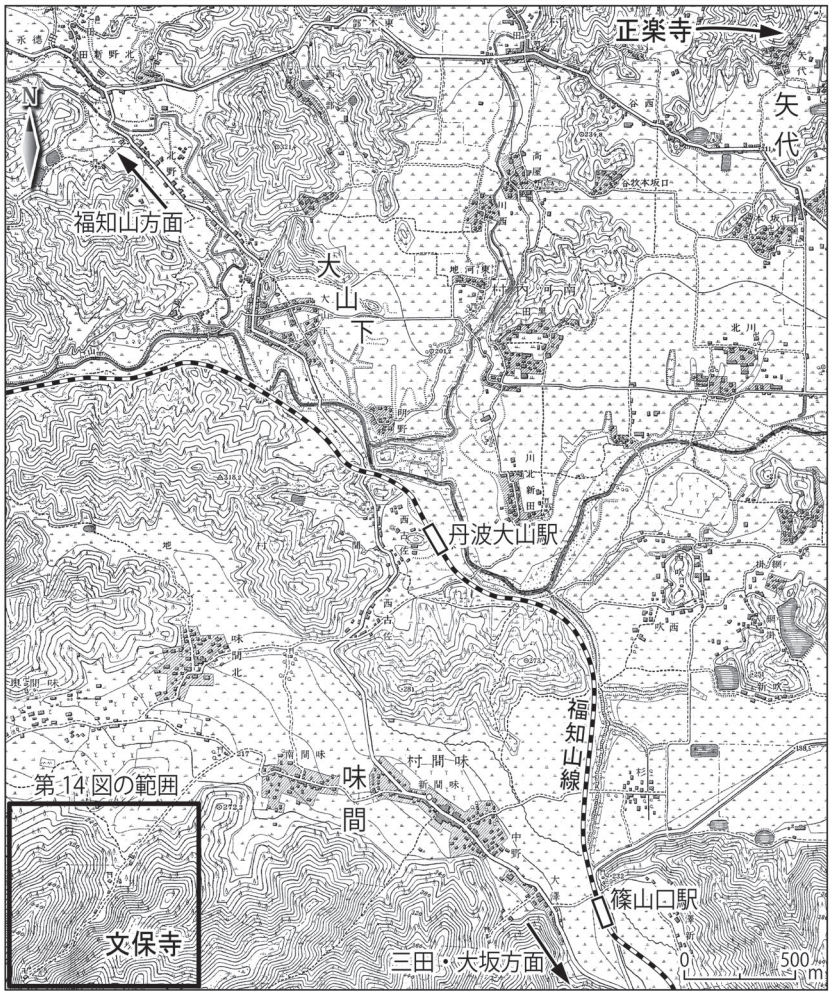
第12図　菩提山神照寺
（『伊勢参宮名所図絵』巻四ノ四十四）
出典：第6図と同じ。

4. 長沢家への滞在と丹波路の旅

下巻の終盤近い三月十五日、京都にある浄土宗総本山の知恩院を訪れ、法親王[38]に謁見して尊い御言葉を授かった。江戸時代末期、法親王が知恩院門主を務め、徳川将軍家の帰依を受けていた。翌十六日は、東寺を参拝してから西国街道を西へと向かった。立場の町、山崎で休憩していると、長沢家の人々が迎えにきた。江戸から旅立つ際も見送りの人々が途中までついてきたことを先に述べたが、このように遠くへ旅立つ人を途中まで見送り、また出迎えに行くことは、江戸時代には一般的であった[39]。そして、広瀬の長沢家に数日間滞在し、昔のことなどを語り合い、一日二日は夢のごとく過ぎていった。広瀬は、称瑞が11歳のとき長沢善五郎の養子となってから、十九歳で出家するまで過ごした場所であった。称瑞の早世した父は長沢宗本で、広瀬の長沢家と親戚関係にあり、先祖の長沢出雲守宗昌は、戦国時代に丹波国大山の領主を務めた。

十九日には、山崎の対岸にある橋本から、淀川の川舟で大坂の八軒家浜に向かった。北浜一丁目にある知人の家には、早くも大山から迎えの人々が来ていた。そのため、長く留まり難く、4日後の二十三日には、大山へ向けての旅を始めた。十三（じゅうそう）、神崎、伊丹（いたみ）、昆陽（こや）、生瀬と大阪平野を縦断して名塩に泊まった。翌二十四日、江戸を出発後50日目にして最後の行程となった。名塩を出ると赤坂峠を越えて、東久保、道場を経て三田で休憩した。そこから北上し、藍の里（藍本）を過ぎ、摂津・丹波国境となっていた日出坂峠を越えて、宿場の古市に出た。その先、波賀野、矢代、犬飼、味間を通って大山の家に辿り着くと、兄をはじめ多くの人々が喜びもてなしてくれた。

『杜陀日記』には、「大山庄園田の家」「園田の兄君」などと記されているが、園田は大山宮・大山下など数ヶ村に点在する地名であった[40]。称瑞の墓碑銘には、大山下村の出身であることが記され



第13図　大山下村および正楽寺・文保寺周辺の様子

注：基図として、正式2万分の1地形図「大山村」「古市村」（明治二十六年測図）を使用した。

第14図　現在の文保寺

注:基図として、地理院地図を使用。

ているため[41]、大山下の園田であった可能性が高い。大山一帯は、明治22（1889）年に大山村となり、その後も数度の市町村合併を経て、2019年5月からは丹波篠山市となっている。明治20年頃の地形図を見ると、街道に沿って家々が立ち並んでいた様子がわかる（第13図）。

その後、『杜陀日記』は、味間の文保寺（ぶんぽうじ）に道場を開いたところで締めくくられている。「此の山やいと静けく、谷水清らにして心も澄みわたり、称名の声わたりの山々に響（とよ）みて、こだまも法の友とは聞こゆ」という、山間の静かな寺であった（第14図）。その2年後の1846（弘化三）年、称瑞は、母の生家があった縁で、矢代（街道沿いの矢代とは異なる）の正楽寺（第13図）に入った。そして、1848（嘉永元）年、江戸の称往院へ戻った。

V. まとめ

『杜陀日記』は、江戸～丹波まで、称瑞の帰郷の旅をまとめた旅日記で、街道の旅と伊勢参宮、寺院などでの法話が主な内容であり、道歌も多く載せられている。その行程は第4図に示した通り、約800kmにも及んだ。途中、何度も各地の寺院に立ち寄って法話を開いたため、旅をしなかった日も

長く、江戸から丹波の大山まで50日かかった。実際に街道を移動したのは27日間であり、Ⅲ章で述べたように、江戸時代の男性の旅人の平均歩行距離である1日当たり約33㎞を旅した。それは非常に長い距離に感じられるが、Ⅱ章で述べた通り、既往の研究では、江戸時代の男性の旅人の平均移動距離が33kmであったことが明らかにされている。『杜陀日記』からも正に同じ距離が得られ、少なくとも移動距離に関しては標準的な旅であったといえよう。時速4kmで、午前・午後に4時間ずつ歩くと1日で32kmになるため、休憩時間も確保できたと推定できる。称瑞は、歩行も速かったものと思われ、随行した人々は峠で度々遅れを取っていたことが判明した。天保十四年の『杜陀日記』の旅以前にも、何度か東海道や伊勢街道などを旅して日記を記しており、街道の旅には慣れていたといえよう。

先にも述べたように『杜陀日記』の冒頭では、旅全体を船旅にたとえ、道先案内する人物を、船頭と同じ読みの「扇童」と名付けている。そして、『杜陀日記』上中下巻の構成は、節分を終えた二月四日に旅立ち、二月十四日という釈迦の命日に、西方浄土を慕うように富士川を西に渡る船に乗ったところで上巻を締めくくっている。中巻は、富士川を渡り終えたところから、東海道を旅して、七里渡しの船に乗ったところで終えていることが指摘されている。そして、下巻は七里渡しの船上での説法にはじまり、丹波大山に到着して林城寺に道場を開くまでを記している。中西が指摘している通り、これらは作品として意図的に設定されている[42]。単なる旅の記録であれば、上中下巻は日付で区切るのが一般的と推定でき、川という地理的要素を巧みに取り入れた作品構成といえよう。

称瑞は、旅立ちの際、日頃交際のあった人々に歌を詠んでもらった。その中には、国学者・歌人の橘守部とその長男である橘冬照夫妻の和歌も含まれている。このような人々と関わりを持っていたことから、和歌に精通していたことや、当時の著名な紀行文を読んでおり、『杜陀日記』の執筆に影響を与えた可能性も推定できる。

Ⅳ章で取り上げた、東海道･伊勢街道の旅から、称瑞の旅や法話、伊勢参宮の様子が判明した。日本橋～藤沢の旅から、江戸時代には遠方へ旅立つ人々を途中まで見送り、出迎える風習があり、称瑞の場合にも当てはまることが明らかとなった。また、僧侶の昼食である斎や、午後の非時にあたる時間に食事を採らないことが、保土ヶ谷から戸塚にかけての記述から判明した。さらに、下巻の桑名付近では、ハマグリを焼いて売っていたことから、茶屋での休憩を避けたように、菜食主義を徹底していた僧侶の掟を厳格に守っていたと考えられる。そして、称往院の法話に出ていた人々との別離を悲しみ、その夜には称往院での法話の夢を見たように、称瑞にとって江戸の人々との別離の旅であったといえよう。

また、Ⅳ章で取り上げた吉田の枡屋での称瑞と主人の会話から、念仏を唱え浄土を希求することが肝要と考えていたことが判明した。そのため、疲れて寝ようとした時でも、仏法を求める人々を前に朝まで法話を開いた。法話は僧侶からしか聞くことができないため、江戸時代には僧侶が歓迎されたものと考えられており[43]、枡屋に泊まったのは偶然であったにも関わらず、称瑞の到着を聞きつけた人々が集まったものと考えられる。僧侶の旅日記の研究事例は少ないが､1725（享保十）年、徳島の丈六寺住職であった凸厳養益は、道中で「是非とも我が家に」と誘いを受けた場面がしばしば見られることが明らかにされている[44]。

僧侶の伊勢参宮が判明する旅日記は少なく､『杜陀日記』の記述は重要である。江戸時代に禁忌の習慣があった伊勢神宮では、外宮･内宮ともに、僧侶は僧尼拝所から参拝する必要があった[45]。『伊勢参宮名所図会』には、外宮・内宮ともに僧尼拝所が描かれており、称瑞の参拝する様子を推定す

ることができた。とりわけ、僧尼拝所と正殿の間を五十鈴川が流れていた内宮については、『杜陀日記』と『伊勢参宮名所図会』や『勢陽五鈴遺響』の記述がおおよそ合致することが判明した。その後、朝熊山や二見浦を廻った点は、庶民の旅と同様であるが、神照寺など内宮周辺の寺院、欣浄寺など山田の寺院を訪れていることは、『杜陀日記』の特徴である。とりわけ、称瑞が住職を務めた称往院と同じ開基・名前の称往院をはじめ、廃仏毀釈により姿を消した寺々を訪れた貴重な記録といえよう。

『杜陀日記』の内容や構成は、中世の紀行文に近い芭蕉のような歌人・俳人の作品よりも、江戸時代の学者・文人の紀行文に近いといえよう。後者の旅日記は、道中の情景・出来事、名所の由来・歴史などを記すことが特徴と考えられている[46)]。『杜陀日記』には道歌も収録されている一方で、地名や日付が漏れず記されている上に旅の様子が詳細に判明し、史跡や地名の解説が多い。その一方で、江戸の人々との別れを悲しむ称瑞自身の感情も記されている。林は、『杜陀日記』の和歌が、伝統的な和歌とは趣を異にするものの、『古今集』『後撰集』『拾遺集』といった古歌から、西行や芭蕉の歌まで言及されていることから、称瑞が風雅の道に傾倒していた可能性を指摘している[47)]。

先に述べた通り、作品としての構成も意識されており、作品と旅の記録という両方の側面を持っているといえよう。また、案内記のように普遍的・客観的な旅日記というよりも、称瑞の旅の記録という面が強いと考えられる。

また、江戸時代の旅日記は、海を見渡す風景や花々の咲き乱れる様子を称賛する記述が多く、道中ではこのような風景を楽しみながら旅していたものと考えられている。そして、中世までとは異なる江戸時代の安定した平和な世が、旅を「楽しみ」と捉える紀行文を生んだと指摘されている[48)]。『杜陀日記』には、そのことを実感していることを記した箇所がある。それは、藤川～岡崎で地元の人から小豆坂（『杜陀日記』では東坂と記されている）は古戦場であったと聞いた場面である。小豆坂は、織田信秀と今川義元、三河一向一揆と徳川家康など度々戦場になった場所であった。

「此のわたり、東坂と云ふは古戦場なるよし、里人の言へり。「其の世に生れなば、いか斗うれたき事ならん。かかる処を見るにつけても有りがたき御代の恵みは、朝に夕に知るべからず」など語らひ行くに岡崎の宿に出づ。」[49)]

江戸時代の人々は、戦国時代までと異なり、平和な世の中という社会背景のもとに、旅を楽しむことができた。称瑞は、そのことを実感しながら旅した人であったといえよう。

付記：本稿の執筆に当り、『杜陀日記』所蔵者の立命館大学文学部 中西健治先生から、『杜陀日記』の解釈について助言を頂きました。また、同じく立命館大学文学部の片平博文先生に、論文の構成等についてアドバイスを頂きました。記して御礼申し上げます。

注

1）中西健治（2012）『『杜陀日記』の研究―近世僧侶の旅日記―』風間書房。
2）新島繁（2011）『蕎麦の事典』講談社、245-246 頁。
3）塚本明「神宮領の特質（三重県編（2017）『三重県史 通史編 近世Ⅰ』三重県、所収）」436-443 頁。
4）山本光正（1985）「旅日記にみる近世の旅について」交通史研究 13、69-84 頁。
5）本多隆成（2014）『近世の東海道』清文堂出版。
6）金森敦子（2000）『芭蕉はどんな旅をしたのか「奥の細道」の経済・関所・景観』晶文社。
7）宮本常一（1987）『庶民の旅』八坂書房。

8）原淳一郎（2017）「幕藩制社会と寺社参詣―米沢藩の旅人統制と国益思想―」（高橋陽一『旅と交流にみる近世社会』清文堂、18-49 頁所収）
9）板坂燿子（2011）『江戸の紀行文』中央公論新社。
10）山本光正（2008）『東海道の創造力』臨川書店。
11）前掲 9)、26 頁。
12）前掲 9)、298 頁。
13）溝口周道（2002）「近世の観光に影響を与えた貝原益軒の紀行文の特徴」ランドスケープ研究 65-5。
14）山本光正（2010）「旅行案内書の成立と展開」国立歴史民俗博物館研究報告 155。
15）ジーボルト（斎藤信訳）（1992）『江戸参府紀行』平凡社、22 頁。
16）谷崎友紀（2014）「近世京都における旅人の観光行動 : 旅日記と小型案内記との比較をとおして」立命館地理学 26、47-58。
17）新城常三（1982）『新稿社寺参宮の社会経済史的研究』塙書房、1145-1148 頁。
18）小野寺淳（1990）「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷」筑波大学人文地理学研究 14、231-255 頁。
19）谷釜尋徳（2007）「近世後期の伊勢参宮の旅にみる楽しみ方の類型―関東地方の庶民による旅日記の分析から―」日本体育大学紀要 36-2、183-196 頁。
20）小松芳郎（1986）「道中記にみる伊勢参宮―近世後期から明治期を通して―」信濃 38-10、13-30 頁。
21）堀田千津子（1998）「伊勢参宮街道における餅」日本調理科学会誌、31-4、91-95 頁。
22）谷釜尋徳（2012）「近世庶民の伊勢参宮の旅にみる歩行距離の実際～旅の全行程の検討～」東洋法学 56-1。谷釜尋徳（2016）「近世後期の東北地方の庶民男女による伊勢参宮の旅のルートと歩行距離―旅日記を史料として―」東洋法学 60-1、103（248）-121（230）頁。
23）宮本常一（1980）『野田泉光院（旅人たちの歴史 1)』未来社。
24）食事をする「時」の意味であり、「さい」または「とき」と読む。当初、仏教では午後の食事を禁じていた。
25）ひじ。僧侶が食事をしない午後の時間帯のこと。
26）前掲 1)、149 頁。
27）「御法」と書く。仏法の敬称。
28）「すぐれている」という意味。
29）神仏習合のこと。日本に元来あった神道と、外国から入った仏教信仰がひとつになった宗教。
30）仏教において、仏・菩薩が衆生を救済するために、本来持っている悟りの智慧の光を隠して、塵のような世俗で悩める人々に受け入れられるように仮の姿となって、衆生と縁を結ぶという意味。
31）江戸時代の歌人、浄土宗の学僧。『夢庵戯歌集』『蓮葉和歌集』などがある。
32）桜井勝之進（2010）『伊勢神宮』学生社（初版 1974 年）。
33）前掲 3)
34）全国を遊行する僧侶のことで、特に時宗の僧侶に多かった。
35）安岡親毅『勢陽五鈴遺響』十一巻（国立国会図書館デジタルコレクション）。
36）現在の三重県営五十鈴公園の東側山麓に存在していた。
37）明治時代以降に、伊勢街道と区別するため伊勢別街道と呼ばれるようになったが、本研究においては便宜上用いた。
38）出家した皇族男性のこと。厳密には、僧籍に入ってから親王宣下を受けた人を指す。称瑞が謁見したのは尊超入道親王（1802（享和 2）―1852（嘉永 5）年）。
39）今井金吾（1997）『江戸の旅風俗』大空社、39-40 頁。
40）今井林太郎編（1999）『日本歴史地名大系（二九）兵庫県Ⅰ』平凡社、58 頁によると、宝暦十一（1761）年、大山宮村の園田家が、同村および大山上村・大山新村・高蔵寺村など大山川流域の諸村内二五ヵ坪に所持する地を別免とすることを出願して許されたもので、年貢・賦課の対象として分付された。
41）称往院の称瑞上人の墓碑銘に、「単誉上人行業甲子記」があり、そのなかに刻まれているとされる。「篠山文華」（三〇四号、2001 年）に掲載されているが、入手困難なため、前掲 1）文献に掲載されているものを参照した。

42）前掲 1)、150-151 頁。
43）深井甚三（1997）『江戸の旅人たち（歴史文化ライブラリー 9)』吉川弘文館、1997。注 44）文献でも引用されている。
44）曽我部遥（2018）「近世僧侶の旅 : 瑞麟山慈雲院丈六寺所蔵『識遺編』を読み解く」凌霄 21、85-106 頁。
45）塚本明（2010）「伊勢神宮領における神仏関係について」人文論叢 27、15-34 頁。
46）原淳一郎（2013）『江戸の旅と出版文化　寺社参宮史の新視角』三弥井書店、145-181 頁。
47）林和利（2014）「中西健治著『杜陀日記の研究―近世僧侶の旅日記―』」論究日本文学 100、234-238 頁。
48）前掲 9)
49）前掲 1)、81 頁。

（本学文学部助手）

Travels of Monks and Ise Shrine Visits in the Edo Period: A Case Study of the 'Zuda Nikki Diary'

Edo Period, Travel Diary, Road, Monk, Ise Shrine

by
Haruto Murakami

The 'Zuda Nikki Diary' is a travel diary written between February and March 1844—the end of the Edo period（1603–1868）—by the Buddhist monk Shozui, about his journey from the Shououin Temple in Asakusa, Edo, to his hometown of Sonoda, Tanba Province, after visiting Ise Shrine.

The journey was similar to the Ise pilgrimage of ordinary people in that it took place along major roads such as the Tokaido Road and Ise-kaido Road. The average distance travelled per day was about 33 km, the same as that of male travellers in the Edo period, according to an analysis based on mapping of the itinerary. However, he strictly followed the rules of monks, such as not eating in the afternoon and adhering to a vegetarian diet.

Unlike the itineraries of ordinary people who travelled for sightseeing, this was a trip to visit a temple to which he had a close connection. In Yoshida, people seeking Buddhist teachings came to the lodges, so he conducted a class on Buddhism. It can be said that he was actively engaged in educating people, not only at temples, but also at Buddhist lectures held in these lodges.

There are few examples of monks visiting Ise Shrine, and the description of the Ise pilgrimage in the 'Zuda Nikki Diary' is important. During the Edo period, it was considered taboo for persons who had come in contact with dead bodies to approach the sacred shrine, and so monks and nuns worshipped at a distance from the shrine in player hall. We were able to clarify the condition of such visits by monks based on the 'Zuda Nikki'. In addition, the descriptions of places designated for worship by monks and nuns found in the Illustrated Collection of Famous Places along Pilgrim Routes to the Ise Shrine and local magazines of the Edo period matched those of the 'Zuda Nikki'.

In the 'Zuda Nikki Diary', the author expresses his sadness at parting with the people of Edo, but at the same time, he is often depicted as enjoying the scenic beauty of the road trip. The diary mentions that he was able to enjoy the travel because the Edo period was a peaceful time without war.